注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
ソードアート・オンライン　ある少年の歩んだ軌跡

【作者名】
アゲハ蝶

【あらすじ】
この物語は、オンラインゲームである《ソードアート・オンライン》の中での、ある少年の物語である。

※この作品は、にじファンから移民してきたアゲハ蝶がリハビリとして？書いている作品です。
そのため、かなり酷い出来上がりになるかもしれませんのでご注意を。

かなり不定期で超絶亀更新です。←ここ重要

第1層

鈍色に光る剣尖が、オレのすぐ隣を通り過ぎた。

同時に、背中をひんやりとした不快な汗が流れる。

敵が再度攻撃するよりも早く、オレはバックステップを踏み、距離を取った。

正直な所、オレはどうも近接戦闘があまり合わないらしい。

出来るには出来るが、やはり合わないのは合わないのだ。

仕方がない、オレより強い奴がいるしソイツと交代すべきだろう。

「キリト、スイッチだ！オレは後方から援護する！」「おう！」

それと同時に、まずはキリトが自慢の片手剣で攻撃を仕掛ける。

左から右に剣を振りぬく。だがそこで止まらず、今度は右から左肩に向けて切り裂く。仕上げに回転し

ながら右から真横に一直線に薙ぎ払う。水平４連撃ソードスキル、《ホリゾンタル・スクエア》。

計四回の連撃により、モンスターの頭上に表示されているＨＰバーを一気に半分以上削った。

しかし、これではまだ倒していない。

なので、オレは相棒であるこの弓で矢を放つ。

狙いを定め、十分に引き絞る。

狙いは急所である心臓!!

「はっ!!」

オレの気合と共に放たれた矢は、寸分違わず敵の急所である心臓に一直線に向かった。

長い断末魔を撒き散らしながら前に倒れていく緑色の巨躯が、あまりに不自然な角度でぴたりと静止し――――。

ガラスが砕け散るような大音響と共に、微細なポリゴンの欠片となり、消滅した。

ふと時刻表示を見ると、既に午後3時を回っていた。そろそろ迷宮を後にしないと、街に帰る前に日が暮れてしまう。

「帰るとするか、キリト」

「そうだな、ナオト。もうくったくただ」

1日分の《攻略》の終わり。

今日もオレ達はどうにか死神から逃れられた。

しかし、ねぐらに戻り、短い休息を取れば、すぐに次の戦いが待っている。

いかに安全マージンを取っていても、こんな危ない橋を渡り続ければ、いつかは運命の女神とやらに愛想をつかされる時が来る筈だ。

問題は、その時が来るまでに、この世界（ゲーム）が《クリア》されるか否か、という事にかかっている。

確かに、生きる事を最優先にするならば、安全圏である街に引きこもり、誰かがクリアするのを待てばいい。

しかしそんな事をせず、こうして最前線で戦い続けるあたり、オレは大馬鹿野郎であるに違いない。

だが、そんな事をしている大馬鹿野郎はオレの近く、というか隣にもう一人いる訳である。

そんな割とどうでもいい事を、オレは親友でもあり、戦友でもあるヤツと一緒に迷宮区の出口を目指して歩き始めながら、考えていたのであった。

第2層

７４層の《迷宮区》に棲息する強敵リザードマンロードとの戦闘を終え、帰り道を辿りながら１０分ほども歩いたオレ達は、前方に出口を見出して同時にほっと息を吐いた。

今のオレ達のホームタウンは、５０層にあるアインクラッドで最大級の都市《アルケード》だ。

規模の面から言えばはじまりの街が大きいが、あそこは今や《軍》の巣窟となってしまっているので立ち入りにくい。

手持ちの瞬間転移アイテムを使用すればどこからでも即座にアルケードへ帰還できるが、少し値が張る代物なので緊急時以外はあまり使いたくない。

まだ日没までは猶予があるし、一刻も早くねぐらに転がり込みたいという誘惑を振り払って、オレ達は目の前に広がる森へと足を踏み込んだ。

他愛のない会話をしながら歩いていたオレ達の耳に、不意に聞き覚えのない獣の鳴き声が聞こえた。

高く澄んだ、草笛のような一瞬の響き。

キリトはぴたりと足を止め、慎重に音がした方向を探った。

基本的にオレとキリトの二人で行動するオレ達は《索敵スキル》を鍛えている。

もちろん、不意打ちを防ぐために鍛えているのだが、スキル熟練度が高いと隠蔽状態のモンスターやプレイヤーを発見出来る。

そうこうする内に、どうやらキリトが先に見つけたらしい。

「ナオト、見つけた。２時の方角、１０ｍ先だ」

そう小声で囁いてくる。

見つけた。

確かに大きな木の枝かげに隠れている。

それほど大きくはない。

木の葉に紛れる灰緑色の毛皮と、体長以上に長く伸びた耳。

視線をよーく凝らしてみると、モンスターの名前が表示された。

その名前を見た瞬間、オレとキリトは息を呑んだ。

《ラグー・ラビット》、超のつくレアモンスターだ。

このウサギ、とりたてて強い訳でも経験値が高い訳でもないのだが――――。

オレはステータス場面から弓を取り出し、背中に掛けた筒から矢を取り出し、狙いを定める。

静かに引き絞り……一気に放つ！

放った矢は狙い違わずラビットにヒットし……

一際甲高い悲鳴が届き、ＨＰバーがぐい、と動いてゼロになった。

ポリゴンが破砕する聞きなれた硬質な効果音。

思わずガッツポーズ。

即座に右手を振り、メニュー画面を呼び出し、アイテム欄を開く。

一番上にお目当ての品はあった。

《ラグー・ラビットの肉》、プレイヤーの間での取引では１０万コルは下らないという代物だ。

そんな高値がつく理由はいたって単純。

旨いからだ。

こんな食材をこの先入手できる可能性は限りなく低いだろう。

なので、キリトと相談する事にした。

「なあキリト、この肉どうする？オレ自身としては凄く食べたいんだが」

「でもなあ……、調理は誰がするんだよ」

「そうだなあ……。アイツに頼むとか」

「アイツって、まさか……」

「ああそうだ、アスナに頼もうぜ」
「そうするか…。オレも食べてみたいし」
そうと決まれば早く呼び出さねば。
ステータスからフレンドリストを開き、アスナを呼び出す。
……
コールして数秒、お目当てのヤツが出てきた。
「何？ナオト君」
「オマエさあ、今ヒマ？」
「そりゃあヒマだけど、どうかしたの？」
「いや、実はさ、今キリトと一緒にラザー・ラビットの肉手に入れたんだけどさ、それでオマ
エに調理を頼みたいなあと」
「ホント!?私も食べていい？」
「調理してくれるならオマエとキリトで半分こしてもらって構わない」
「ホント!?やった！でもさ、調理どこでするの？」
「あ、忘れてた」

「どうせそうだと思った。だから今回は食材に免じてわたしの部屋を提供してあげなくもないけど」

「オレは別にいいけど、キリトを呼んで大丈夫なのか？」

「あんたがいる限り変な事はしないでしょ」

「りょーかい。キリトもそれでいいか？」

「ああ、というか正直早く休みたい」

「という訳だ。どこで待ち合わせだ？」

「６１層のセルムブルグの転移門で待ち合わせよ」

「なら今から行くよ」

「待ってるわよ」

そうして通信を切る。

「という訳だ、こっから直接で転移するぞ」

「おう」

アイテム欄から瞬間転移アイテムを取り出してこう言う。

「「転移！セルムブルグ！」」

第3層

アスナが住んでいるセルムブルグに着いた時には既に日が暮れかかっていた。

転移門は古城前に設置されていて、そこから街路樹に挟まれたメインストリートが市街地を南
に貫いている。

両脇には洒落た店舗や住宅が立ち並び、行き交うＮＰＣやプレイヤーの格好もどこか垢抜けている。

「遅いよキリト君」

「おいおい、オレは無視ですか……」

「あらいたのナオト君」

「ひどくね⁉まあアスナのその扱いにも慣れたけど」

「それにしても、広いし人は少ないし、開放感あるなあ」

「確かにそうだが、オレにはどうも合わん。やはり田舎が一番だな」

「まあどうせ田舎者のナオトには無理よねぇ」

「おいおい、いくら何でもそれは酷くないか？なあキリト」

「ごめんナオト、そればっかりは否定出来ない……」

「ひでぇ！」

となんともくだらない会話をしながら歩く事十数分。

アスナの住む部屋に到着した。

部屋は、目抜き通りから西に折れてすぐの所にある小型の、しかし美しい造りのメゾネットの最上階だった。

「さて、お邪魔しまーす」

「お……おじゃまします」

いつ見ても思うが、よくこれだけ整理出来るな。

広いリビングダイニングと、隣接したキッチンには明るい色の木製家具がしつらえられ、統一感のあるモスグリーンのクロス類で飾られている。

オレ達のねぐらに招待しなくてよかった、と今更ながら思う。

「なあアスナ、これいくらぐらいかかってるの……？」

即物的なキリトの質問に、

「んー、部屋と内装あわせると2千kくらいかな。着替えてくるからその辺に座ってて」

サラリと答えるとアスナはリビングの奥にあるドアに消えていった。

しばらくすると、いかにも年頃の女の子、といった風な淡いピンクのパジャマに着替えたアスナが奥の部屋から現れた。

着替えと言っても、実際に脱いだり着たりの動作がある訳ではなく、ステータスウィンドウの装備フィギュアを操作するだけなのだが、着衣変更の数秒間は下着姿の表示になってしまう。

豪胆な野郎プレイヤーならいざ知らず、アスナは女性だ。

そんなオレの考えを知るよしもないアスナは、じろっと視線を投げ、言った。

「二人ともいつまでそんな格好してるのよ」

「あ、悪い」

「いや、オレは二人が食い終わったら帰るよ？」

「なんでよナオト、あんたも泊まりなさいよ」

「いやそうしたいのはやまやまなんだが、アスナは違うだろ？」

「違うって？」

（ボソッ）「キリトと二人きりで過ごしたいんだろ～？」

「へっ？」……ボンッ！

ものの見事に赤くなっている。

「まったく、面白いなアスナいじると」

「も、もう！からかわないでよ!!／／」
「悪い悪い」
「そうだぞナオト、あまりいじるなよ」
あきらかに不機嫌だ。
「悪かったって。オマエもむきにならんでも」
「で、どんな料理にするの？キリト君」
「シェ、シェフのお任せで」
「そうね……じゃあシチューにしましょう。で、一応ナオト君は？」
「一応ってなんだよ一応って。オレは家に帰って自分で適当に考えるよ」
「どうせまともな物食べてないでしょ。いいから何食べるの？」
「そうだな……お前らと同じで。あ、ラビットの肉は入れんでいいぞ」
「わかった。ちょっと待ってて。今から作るから」
キッチンは広々としていて、巨大な薪オーブンがしつらえられた傍らには、高そうな調理器具が数々並んでいた。
アスナは棚から金属鍋を取り出し、一口大に切ったラビットの肉とこれまた一口大の野菜や香草と水を入れ、蓋をする。

「ほんとはもっと色々手順があるんだけどねえ。この世界で料理してもつまらないわ」

「まったくだ。オレも料理人の息子だから一応料理するんだが、滅茶苦茶つまらん」

文句を言いつつも、鍋をオーブンに入れ、メニューから調理開始ボタンを押す。

果たして１０分ほどで、シチューが出来上がった。

眼前に置かれた大皿には湯気を上げるホワイトシチューがたっぷりと盛られ、鼻孔をくすぐる芳香を伴った蒸気が立ち込めている。

「さて、料理も出来たし、食べますか」

「そうね。早くしないと冷めちゃうし」

「じゃあキリト、オマエが号令かけろ」

「あいよ。では、せーの！」

「「「いただきます!!」」」

第４層

「「いただきます！」」

そう言うとキリト達は本来最高級食材である筈のソレを口をあんぐりと開けて頬張る。

そういうオマエはって？オレももちろんそうだよ。

腹減ってるんだししょうがないだろ。

オレ達は一言も発する事なく、ただただ黙々と食べていった。

そして――――

「「ごちそうさま」」

やがて、きれいに食い尽くされた大皿と鍋を見てアスナは深く長いため息をついた。

「今まで頑張って生きてて良かった……」

「まったくだ。そうだキリト、味の方はどうだった？」

「味って言われてもなあ……、あまりに旨すぎて食べるのに夢中だったから覚えてないや…」

「そこは覚えて感想ぐらい言ってくれよ！アスナは？」

「ごめん、私もそこまで……」

「オマエ等揃ってひでぇ！」

「それにしても、不思議ね……。なんだか、この世界で生まれて今までずっと暮らしてきたみ
たいな、そんな気がする」

「……俺も最近、向こうの世界のこtを全然思い出さない日がある。多分俺だけじゃないと思う」

「多分、みんな馴染んできてる。この世界に……。でも、わたしは帰りたい。

だって、あっちでやり残したこと、たくさんあるから」

「……オレは、オレは戻りたくない。ここでオマエらと過ごした日々が消えてしまうような気がする。オレはもう、大切なものを失いたくない……」

「ナオト……、お前……」

「すまねぇな、変な事言って。そうだ！向こうに戻った時にまた会えるようにあらためて自己紹介しようよ！」

「いいアイディアね、それ」

「だろ？じゃあまずキリトから」

「お、俺!?まあいいけど。桐ヶ谷和人。確か１６歳」

「同い年か……。じゃあ次はアスナ」

「わたしはね、結城明日奈。キリト君と同じ１６歳」

「お前もかよ！じゃあ次はオレだな。室井直人。お前らと同じ１６歳だ。それにしても、全員同い年とは、何かの偶然か？」

「ううん、偶然じゃないよ。きっと」

「そうだ、これは偶々じゃないし、向こうに戻ったとしても俺らはずっと3人で一つだ。だから安心してくれナオト」

「……オレは、もう、失わなくてもいいのか……？」

「ああ」

「もう、休んでもいいのか……？」

「うん。だから心配する事なんてないよナオト君」

……グスッ……

「……お前ら……、ありがとな。こんなオレを友人として見てくれて」

「ううん、いいよ、お礼なんて。だからね、今は一杯泣いていいんだよ」

「そうだぞナオト。もっと俺達の事頼っていいんだぞ」

その日、オレは向こうの世界で無くした筈の《人の優しさ》をもう一回取り戻した。

第5層

「……なあ二人とも、今日はさ、その……」

「何？ナオト君。言ってくれないとわからないよ？」

「あのさ、一緒に寝てもらってもいいかな……？」

「へ？……いいよ。キリト君もいいよね？」

「お、俺はその……」

「キリト君!!」

「わ、わかったよ。しょうがないな……」

「ホント、すまないな。オレが弱いばっかりに……」

「それは違うぞナオト。お前が今まで一人で背負いすぎただけだ。むしろこれで正常な奴だ」

「そうだよナオト君。だから今日は3人で並んで寝よっか？」

「うん……」

「よし、3人で布団並べるぞ！アスナとナオトも手伝えよ！」

「「わかった」」

そして3人で仲良く布団を並べた後・・・

「「おやすみ」」

「起きてるか？アスナ」

「起きてるよ……」

「ナオトもう寝ちまったな。にしても、一体こいつに何があったんだろう……？」

「わからない。でも、怖がってる……」

「何を？」

「大切な人を失うを怖がってる。失わないためなら、それこそ自分の命さえ捨ててしまう程……」

「……だったら、俺たちがそばにいてやらなきゃな」

「……そうね。でないと、ナオト君壊れちゃうよ……」

『……母さん……』

「!!」

『……母さん、どこにいるの……?』

「大丈夫よ、ナオト君。ここにいるよ……」

『……もう、どこにも行かない?』

「大丈夫だよ、ナオト君。もうどこにも行かないから……」

『……ホント?もう、オレを置いてったりしない……?』

「そうだよ。だから安心して眠っていいよ……」

『……ありがとう、母さん。オレ、少し休むね……』

「お休み、ナオト君……」

そう抱きしめるアスナには母性が溢れていた。

「……なんかアスナの将来見てるみたいだな……」

「へ?」 ボンッ!

「ちょ!?何言ってるのよキリト君!」

「い、いや、つい……」

（で、でも、キリト君との子供だったらなあ……」

「アスナ、途中からだだ漏れ……」

「え？マジ⁉」

「うん。オレとの子供がどうのこうのって……」

「はぁ……こんな形で伝わるなんて……」

「そ、そのもしかしてそれって……」

「キリト君、大事な話していい？」

「え⁉あ、はい……」

「あのね、キリト君。

わたしは、キリト君の事が大好きです。

だから、結婚してください」

「ずっと、俺もアスナの事が好きだったと思う。だから……

俺でよければ、結婚してください」

そう言いながら、キリトはおもむろに両腕をを伸ばしてアスナの体を抱き寄せた。

そのまま、桜色の唇を自分の唇で塞ぐ。

「俺の命は君とナオトのものだ。だからアスナのため、ナオトのために使う。最後の瞬間まで一緒にいる」

「……わたしも。わたしも絶対に2人を守る。これから永遠に守り続ける」

「……だったらオレは、二人をこの命と引き換えにでも現実世界に帰してみせる……」

その夜、オレには守りたいものが出来た。

第6層

次の朝。

オレが起きると、既に2人はリビングにいた。

「……おはよ〜」

「おはよ、ナオト君」

「おはよう、ナオト。お前相変わらず朝滅茶苦茶弱いな」

「しょうがないだろーが！眠いんだよ！」

「子供だなあ……、ナオト君も」

「うるせえ！そういや、今日は二人とも早いな。いつもはキリトも遅いのに今日はなんかあったのか？」

（どうするの？キリト君）

（言うしかないだろ）

「おーい、内緒話してないでなんか言ってくれよ」

「ナオト、俺たちさ、結婚する事にしたんだ」

「へー、結婚するんだ……って、

結婚!?」

「そうだよナオト君」

「いつ決めたんだ!?」

「昨日だ。お前が寝てる間に、な」

「マジか!?でも、良かった」

「へ？」

「お前ら、やっとかって感じだし」

「って言う事は……」

「そうだ。全部筒抜け」

ボンッ!!

「で、どっかに移り住んだりすんの？」

「ああ。２２層の南西エリアにログキャビンがいくつか出てた。だからそこに住もうかなって」

「え⁉キリト君そんな話してたっけ？」

「全然。今話したとこ」

「まあ、キリト君が言うなら……」

「そうと決まればすぐに行動だ。３人で《血盟騎士団》の団長と話つけた後、家買いに行くぞ」

「わかった」

「じゃあ支度してくる」

「おう」

《血盟騎士団》のギルドにて

「アスナをうちのパーティに引き抜かせてもらう」

オレがそう言うとヒースクリフはかすかに苦笑い。

「アスナ君を引き抜きたいのはわかる。

欲しければ、実力で奪い給え。私と戦い、勝てばアスナ君を連れていくがいい。だが、負けたら君たちが血盟騎士団に入るのだ」

その言葉を聞いた瞬間、どうやらオレはこいつが理解できた気がした。

あいつもオレと同じで、戦いに魅入られた人間なのだ。

「いいだろう。その果し合い、このナオトが引き受けた。オレが負ければ血盟騎士団に入ろう」

「ちょっとナオト君!?」

「頼んだぞ、ナオト」

「キリト君も!?」

「おう。任せとけ！」

「二人とも……。はあ……」

「それに、考えようによっちゃ、目的は達するとも言える」

「なんで？」

「俺はアスナといられればそれでいいんだ」

「そうだぞアスナ。まあこの果し合いで死ぬ事はないだろう」

「……まあ、二人がそう言うならいいけど……。ナオト君、絶対に勝ってよ!!」

「あまりオレを見くびるなよ？」
「勝って来いよ！」
「ああ。行って来る」
闘技場にて。
「さて、始めるか」
「そうする事にしよう」
「初撃決着モードでいいだろう？」
「ああ。君がそう望むのなら」
「まったく。後でギャラくれよな」
「どうせこの後君達は我がギルドの一員だ。任務扱いにさせていただこう」
「けっ、抜かせ」
オレはそう言いながら腰から愛用の刀を抜き放つ。
同時に奴も十字楯から剣を抜く。
そして……
「いざ尋常に、勝負!!!」

第7層

刀を抜き放ち、オレは中段に構える。

そのままヒースクリフに向けて突っ込み、斬りかかる。

対してヒースクリフは左手の十字楯で防ぐ。

並の相手だとこれで倒れてくれるがなあ……。

悔しいが、これは名刺代わりの攻撃だ。

左に流されたオレの刀を上手く操り、今度は右に横一文字に薙ぎ払う。

が、それはヒースクリフに上手く避けられる。

「もらったァァァ!!!」

奴が避けた隙を狙ってオレは奴の懐に体を滑り込ませ、右脇腹から左肩にかけて斬撃を放つ。

上位刀技、《流れ胴切り》だ。

それをヒースクリフは左手の十字楯で防ぐ。

お返しとばかりに、右手の剣で斬りかかってくる。

それをオレは即座に刀で防ぐ。

そんな攻防が続く。

時たま、お互いの小攻撃が抜けてじわじわとダメージを与える。

しかし、オレは興ざめしていた。

奴は、こんな筈ではない。

もっと強い筈だ。

それなのに、それなのに!!

「貴様、手を抜くとは……。このオレを侮辱しているのかッッ!!!」

ついにＨＰの残りが５割に近づいてくる所まで来た。

瞬間、ヒースクリフの顔に焦りの色が見えた。

と同時に、奴の攻撃のテンポが少し遅くなった気がした。

刹那、オレは全ての防御を捨て去り、一気に仕掛けた。

「ヒースクリフ、引導を渡すッッッ!!!!!」

最上位刀技、《天竜暴れ水》。連続８回攻撃。

回数こそ少ないものの、どの一撃も強烈な重さがある。

砕け散る水のように放たれる斬撃。

「ぬおッッ!!」

奴はとっさに楯でガードするが、お構いなしに攻撃を与える。

――――――いける!!

オレが勝利を確信した瞬間、世界が、ブレた。

「何!!」

どう表現すればいいのだろう。

コンマ何秒、そんな一瞬のあいだ、奴を除いたすべての動きが遅くなった。

奴の右手にある剣が襲い掛かってくる。

だが……。

「そうだ、これと戦いたかった!!」

そう言いながらも刀で弾く。

しかし、お構いなしに瞬間的にオレの背後に移動する。

気配を感じたオレは振り向きざまに刀で防ごうとする。

が、奴の方が一枚上手だった。

オレの刀を左手の楯で防ぎ、がら空きになったオレへ襲い掛かった。

結果、ピタリと戦闘を終わらせるのに足るだけのダメージが奴の単発突きによって与えられた。

視界の端で戦闘の終わりを告げるウィンドウが表示されるのが見えた。

「ナオト!!」

「あ、ああ……。大丈夫だが……。」

しばしオレは呆然としていた。

なんだあの動きは……。

もはやポリゴンがブレて見えたぞ……。

そのヒースクリフはというと、表情は険しかった。

何も言わずに闘技場を去っていった。

第8層

「おいおい、なんだこれは」

「何って、見た通りよ。さ、立って立って」

「地味な奴って頼まなかったっけ……」

「これでも十分地味な方だよ。うん、似合う似合う！」

「そうだぞキリト。オマエは片手剣使いだからまだ映えるけどな、オレは弓使いだぞ？どんだけ会わないと思ってんだよ」

ちなみにこの会話をしているのはオレの家だ。

注目を浴びすぎたというキリトの言葉を受けて、急遽オレの家を避難先にする事にしたためだ。

「あ、そうだ。いくらその、ふ、夫婦だからといってもあいさつしなきゃね。これからギルドメンバーとしてよろしくお願いします」

「よ、よろしく。といっても、アスナが副団長で俺はヒラだからなあ……。こんな事も出来なくなっちゃったよなあ……」

そう言ってキリトはアスナの背中を人差し指でそっと撫でる。

「ひやあっ！」 ゴチン!!

「あだっ!!」

「何やってるんだこのバカが。やっていい事と悪い事があるだろーが」

「悪かったって」

晩秋の昼下がり、しばしの静寂が訪れる。

「そういえばさ、キリト君って何でギルドを、人を避けるの……？」

「……もう1年以上経つかな……。一度だけギルドに入ってた事がある。《月夜の黒猫団》って名前の、小さなギルド。

ある日、リーダーはギルドの本部にする家を買いに行った。

俺たちは迷宮に入ってて、帰りにトレジャーボックスを見つけたんだ。

でも、それは罠だった。モンスタートラップ。更にそこは結晶無効化空間だった。今まで隠してた技も全部使った。でも、俺以外全滅した……。

リーダーは、新居の鍵を持ってひたすら待ってた。

生き残った俺が全て話した。ベータ出身の事と、本当のレベルの事も。

そしたらこう言ったんだ。

『ビーターのお前が、僕たちに関わる資格なんて無かったんだ』って」

「その人は……どうなったの……？」

「自殺した」

その言葉を聞いてアスナはびくっと震えた。

「外周から飛び降りたよ。最後まで俺を呪っていただろうな……。
みんなを殺したのは俺だ……。あの時隠してなければ、みんなを納得させられた筈だ……。
リーダーを、サチを、俺は殺した……。俺は、殺したんだ……」

その時、アスナが両手でキリトの頭を抱え、微笑を湛えながらこう言った。

「わたしは死なないよ。だって、

わたしは……わたしは、君を守るほうだもん」

「それに、オレは二人を向こうに帰すまでは死ぬつもりはない」

「それも違うよナオト君。みんなで、3人で帰る。そして、またみんなで集まるの」

「……そうだな。という事だキリト。安心しろ。

俺たちは死なない。１人も欠ける事なく全員帰るんだ」

第９層

翌日の朝、オレとキリトは派手な純白のコートに袖を通した後、５０層《グランザム》に向かった。

今日から血盟騎士団の団員としての活動が始まる。

といっても、本来なら五人一組で組む。

だが、アスナが副団長としての権限を発動し、オレとキリトとアスナの３人でパーティを組む事になった。

今までとなんら変わらない。筈だったのだが……。

「訓練……？」

「そうだ。私を含む団員５人のパーティを組み、ここ５５層の迷宮区を突破し、５６層主街区まで到達してもらう」

そう言うのは以前ヒースクリフと話した時に同席していた４人の内の１人で、どうやら斧使いの奴らしい。

「ちょっとゴドフリー！二人はわたしが……」

そう食って掛かるアスナに、

「副団長と言っても規律をないがしろにされては困りますな。実際の攻略時のパーティについては了承しましょう。ただし、一度はフォワードの指揮を預かるこの私に実力を見せて貰わねば」

と言い返す。

「あ、あんたなんか問題にならないくらい二人は強いわよ……」

「まあまあ落ち着けって、アスナ。

貴方が何を言おうとも構わない。その汚名、戦場で晴らしてみせよう」

そうオレが言い放った後、ゴドフリーとかいう奴は３０分後に西門に集合、と言い残して去っていった。

「なあにアレ!!」

「まあまあそう怒るなよアスナ。心配しなくてもちゃんと2人で帰ってくる。な、キリト?」

「ああ。だからここで待っててくれ。すぐ帰ってくる」

「でも……、何があるかわからないし……」

「大丈夫。オレ達がアスナ置いてって死ぬ訳ないだろ」

「ホント、こんな事に巻き込んじゃって、ごめんね……?」

「夫婦なんだからこれくらい当たり前だよ。それに、アスナと2人で一緒に住むのまだ諦めてないから……。だから、少し待ってて、アスナ」

「……うん。行ってらっしゃい」

寂しそうに頷くアスナに手を振って、オレ達はギルド本部を出た。

西門にて。

先に来ていたゴドフリーや団員とオレ達は合流したのち、出発することとなった。

歩き始めたキリトを、ゴドフリーの声が引き止める。

「……待て。今日の訓練は限りなく実戦形式に近い形で行う。危機対処能力も見たいので、諸君らの結晶アイテムは全て預からせてもらう」

「おいおい、マジかよ。そんなん聞いてないぞ」

「今通告した。さあ早く！」

周りを見てみたが、オレ達以外は全て預けていたので、オレ達もし

ぶしぶ従う。

念の入った事で、ポーチの中まで探される。

「よし、では出発!!」

ゴドフリーの号令に従い、オレ達は西にある迷宮区へと歩き出した。

第１０層

「よし、ここで一時休憩！」

今まで歩き回り、モンスターを片っ端から倒してきたオレ達は、ここで一旦休憩することとなった。

「食糧を配布する」

そう言いながらゴドフリーは革の包みをこっちに放ってきた。

中を見ると、いかにも不味そうな固焼きパンとビン入りの水が入っていた。

ホントはアスナの作ったサンドイッチが食えたのになあ……。

そんな事を考えつつ、オレはパンを食べ、水で胃に流し込んだ。

その時、ふとグラディールの姿が目に入った。

奴だけは包みに手をつけてない。

まさか……!?

キリトとオレは咄嗟にビンを投げ捨て、口の中の水も吐き出した。

しかし、すでに手遅れだった。

不意に全身の力が抜け、その場に崩れ落ちた。

どうやら麻痺毒を盛られた様だ。

「クッ……クックックッ……」

オレの耳に耳障りな甲高い笑い声が届いた。

「クハッ！ヒャッ！ヒャハハハハ!!」

「どういう事だ……グラディール……」

「ゴドフリー!!いいからさっさと解毒結晶を使え！」

キリトがそう言うと、ゴドフリーはのっそりとした速度でポーチから結晶を取り出そうとした。

が、それよりも早くグラディールは結晶を左足で蹴飛ばした。

更に、蹴飛ばした結晶を拾い、自分のポーチへと落とし込んだ。

これで解毒するという選択肢が消えちまった。

「ゴドフリーさんよぉ、バカだバカだと思っていたが筋金入りのバカだなァ！」

「ま、待てグラディール！お前……何をするつもりだ……」

「うるせえ。いいから死ねや」

そう言いながら両手剣を抜き放ち、無慈悲に振り下ろす。

「ぐあああああああ!!」

一気にＨＰが０になり、無数のポリゴン片となって四散した。

グラディールは剣を振りかざしながら、

「俺達はァー、荒野で犯罪者プレイヤーに襲われェー、勇戦空しく４人が死亡ォー！」

と言い放った。

そして……

「ぎゃあああああ!!」

もう一人の団員も四散してしまった。

初めてじゃない、とオレは考えていた。

「グラディール、オマエ初めてじゃないだろ……」

「それは褒め言葉かァ？」

そう言いながらインナーの袖を捲った。

瞬間、オレは言葉を失った。

「そのエンブレム……ラフコフの……!?」

グラディールはにんまりと頷いて見せた。

「さァて、仕上げと行くかァ！」

そう言いながら両手剣を振り上げた瞬間、オレはあらかじめ太もものホルダーから抜いておいたナイフを奴の顔面目掛けて投げつける。

しかし、麻痺毒のせいで狙いをそれ、左腕に刺さった。

絶望的な程わずかにＨＰが減る。

「……ってえな……」

奴が剣を振り下ろすのが見える。

ああ、オレはここで死ぬのか……

来るはずの死に向けて目を閉じた。

その時、一筋の白い旋風が駆け巡り、奴は空中高く跳ね飛ばされた。

第11層

「……間に合った……間に合ったよ……神様……間に合った……」

震えるその声は、オレ達にとって天使の羽音にも優る程美しいように聞こえた。

「生きてる……生きてるよね……」

「ああ、なんとかな……」

「俺もだ……生きてるよ……」

そう呟くオレの声はかなり掠れていた。

傍らでアスナが、回復結晶を取り出し、

「ヒール!!」

と叫んだ。

これでＨＰは全快した。

「……待っててね。すぐ終わらせるから……」

「ア、アスナ様……どうしてこのような所に……。こ、これは、訓練、そう、訓練でちょっと事故が……」

裏返ったグラディールの声はアスナの細剣で遮られた。

「ぶあっ!!」

グラディールが片手で口を押さえながら仰け反る。

その眼には見慣れた憎悪の色が浮かんでいた。

「このアマァ……調子に乗りやがって……。ケッ、ちょうどいいや、どうせオメェもすぐに始末してやろうと……」

だがその台詞も最後まで口にする事が出来なかった。

細剣を構えたアスナが猛然と攻撃を開始したからだ。

奴も両手剣で必死に応戦するが、如何せん速さが全然違う。

ついにＨＰが危険域に突入したところで奴は得物を投げ出し喚いた。

「悪かった!!俺が悪かった!!だから――――」

細剣がかしゃりと逆手に持ち替えられた。

「ひぃぃぃっ！死に、死にたくねえ――――――――っ!!」

その声にアスナは切っ先を止め、ぶるぶると激しく震えた。

この世界で死ねば、現実でも死ぬ。

即ち、殺せば殺人となってしまう。

アスナにはその経験がない。

奴は、そこを突いて――――!!

「アスナ引け!!」

オレが声をかけるが遅かった。

ぎゃりいいん、という金属音と共にレイピアが弾かれた。

「あっ……!?」

「アアアア甘ぇ――――――――――――んだよ副団長様アアアアアア!!」

狂気を孕んだ絶叫を振りまきながら、奴は得物を振りかざす。

「「やらせるものかァァァ!!!」」

叫びながらオレ達は奴の懐に潜り込む。

ガスッ!!

オレが両手を交差させて斬撃を防ぐ。しかし、切り落とされる。

が、そこにキリトの手刀が放たれる!!

アーマーの継ぎ目にヒットしたそのスキルは、奴のＨＰを残さず食い尽くす。

大剣が地面の落ちる音に続いて、耳元で掠れた声が囁いた。

「この……人殺し野郎が」

くくっ、と笑い。

グラディールは、その存在を無数の破砕片へと変えた。

「……ごめんね……わたしの……わたしのせいだね……」

「アスナ……」

「ごめんね……。わたし……も……もう……2人には……あ……会わな……」

そう言うアスナをキリトが抱きしめる。

「……！」

「……もう……二度と……二度と失いたくない……だから……君を絶対に放さない……」

「……言ったろ。死んでも二人は向こうに帰すって」

「……じゃあナオト君は……」

「オレか？バカな事聞くな、前に言っただろ。

オマエら残してなんか絶対死なないって」